

成人向
FOR ADULT



MANIAC JOB SYSTEM


presented by EGOISM 2007




MANIAC JOB SYSTEM

マニアックジョブシステム

～勝負服でニューゲーム～





Menu

MANIAC JOB SYSTEM

カスカベアキラ

05

リトルナースの看護学

鳥越やよい

18

レーザー様
危ない！

今日もまた
パンネロさんの魔法に
助けられてしまった

僕も何かすごい
ジョブの力があれば
もっと皆さんの
手助けができるのに…

レーザーにできる
ジョブが
ないかって？

MANIAC JOB SYSTEM

カスカベアキラ

そうだなあ…
このあたりならすぐ
手配できるけど

ロクなのが
無いですね…

ほり

こ、これでしたら
なんとかか…

おっ！
メイドな！

助かったぜ
トマジが
砂海亭の人手不足で
困ってたんだよな

レーザーならきつと
すぐジョブマスターに
なれるさ！

砂海亭って…
ですか？！

メイド

時給：700
月給：50000



こんな事で皆さんの助けになる様な力が手に入るんだろうか？

身の上を隠し砂海亭の専属メイドとして働き始めたはいいけど

しかもなぜか女の子の恰好だし：

そもそもパーティから離れてちや意味無いんじゃないあ：

仕事はもう慣れたかい？
*ラモン君

※ラーサーの源氏名
仮の名



あトマジさんお世話になってます

なんで自分がこんな事をーって顔してるぜ

実はもっと楽しく働ける方法もあるんだけど…聞いてみるかい？

「にこにこ」
「にこにこ」
ってわけよ

なっ！

砂海亭



でっ
できません
そんなこと……

おやおや
強がつちやって

それは……

そんな事言って
さつきからこの恰好で
興奮してんだろ？

やっ



十分素質アリだな

……これから
職業訓練も兼ねて
予行演習してみるか？

……



あ……
あの……

お……
お願い……します

ズキッ

ズキッ

あ：だめです
そんなとこ：

こんな状態で
お客さんの前に出て

うあ…！

何もしないうちに
イっちゃったら
申し訳がたたないだろ？

俺が
商売人として
「ご奉仕」の心得を
教え込んでやるから

ん…っ

体で覚えるんだ

びるびる…っ





：ごめんなさい
あんなことじゃ
お仕事に
ならないですよね

っん：

キキ

キキ

ん……



むしろ本当に
あれだけでいける
なんてさ

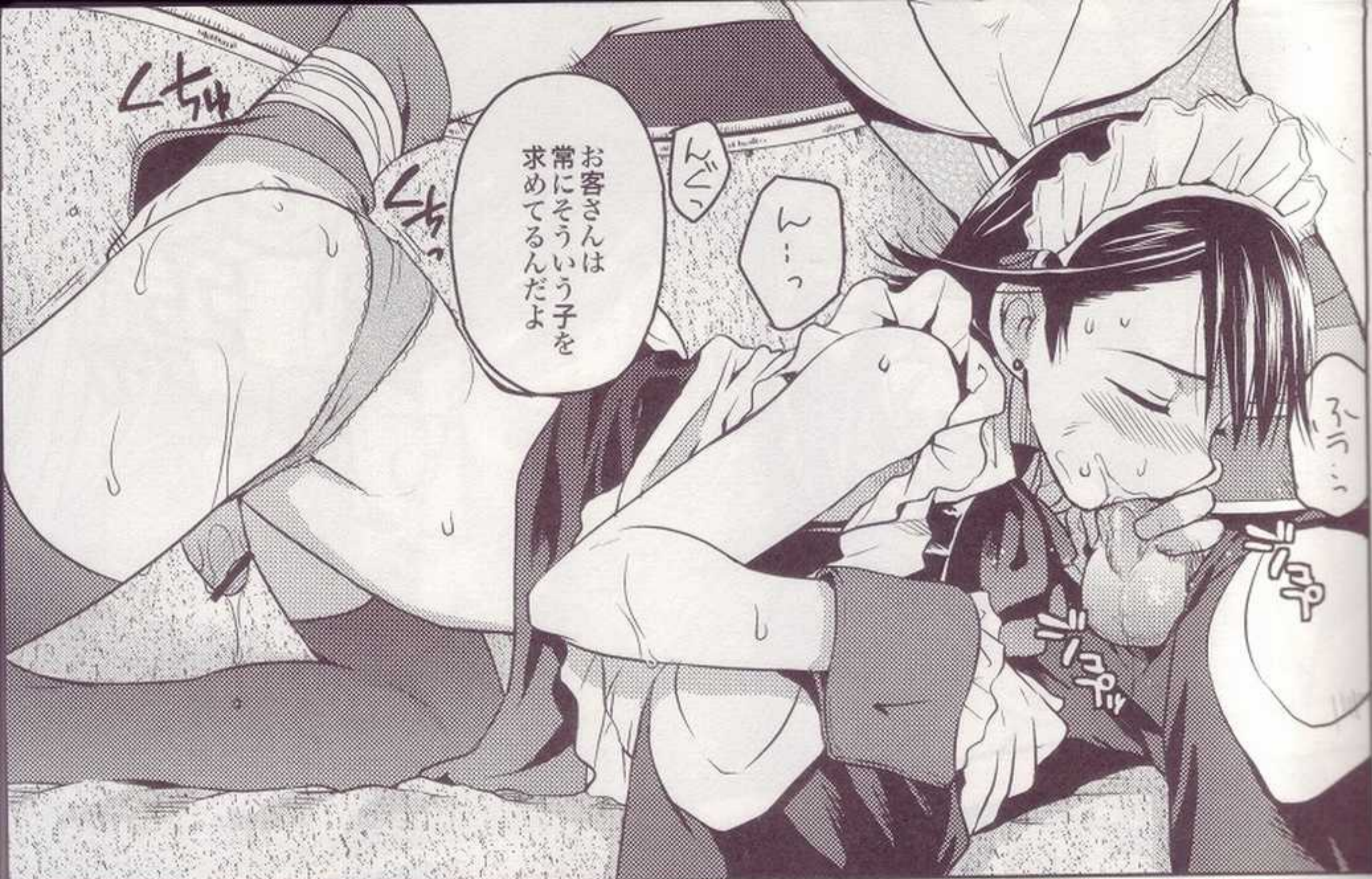
はは



かわいい顔して
相当淫乱なメイドだ
と思ったね

あーあー
あーあー
あーあー

あーあー



お客様は
常にそういう子を
求めてるんだよ

んふ

んっ

んふ

んっ

んふ

んっ



優秀だな

んふ

んふ……!

んふ



……んんっ

んふ



ほら、もう
硬くなってきた

んふ

んふ



……やばっ
イキそ……



ご心配には
及びません

いえ……



実は

この服を着ていると
おかしいんです
だんだん
お尻が疼いてきて……



こ、ここからが
ご奉仕の心得
最終ステージ
なんですすね……!

あ、ああ

無理すんなよ
こればかりは
今度でもいいんだぞ



そっか

あんたには
訓練なんて
必要なかったかもな

うあ……

ヒッペン!!

ヒッペン!!

くち

あーっ…

全部入った...な

動かすぞ

キチッ!!

はあ...っ

ヒッペン!!

ヒッペン!!



はあ

あんっ

あっ

はあ

ひっん…ああつ

そ、そこ
気持ちひ…です…っ

っ…いい…っ

あ

あ

っはは…

女みたいな声出して
感じちゃって…
その服がそんなに
気に入ったのかい？

ツ치가…

あああつ

はー

はー

オッ

まさか
こんな展開になるなんて
僕自身全く予想して
なかったけど:

は……あつ
や……っ……あ
またイッチャ……

アッ

おあ

アッ

この調子ならすぐ
ジョブマスター
出来そうだし:
ここに来て
よかった:のかも?

「ご奉仕」のライセンスを手に入れた



秘密です

いったい
どんな訓練して
きたんだ!?

エロいな

ご奉仕…ッ!



すっげー!
「ご奉仕」ライセンス
が一杯じゃんか!



ゴゴゴ

ラーサーだけでは
不公平よね?

あなたにも新しい
ジョブを斡旋して
さしあげてよ



いよーし!
それじゃ早速その
実力を披露…



?

END



空気


INTER MISSION

この度は、「MANIAC JOB SYSTEM」をお手に取っていただきありがとうございます。
前回の「俺的解釈」では輪姦、
今回は女装をテーマにお送りしています。
メイド皇子(?)が描けて楽しかったです。
→は次ページからの小説で出てくる
リトルナースの恰好を描かせて貰いました。
これはまたマニアック!

では、鳥越さんの小説に
ハトンタッチします!

アルケイディアばんざい!

2007.8.17

カスター
アキラ 



■ リトルナースの看護学 ■

「どうかお大事になさってくださいね」

ラーサーはベッドに横たわった少女の手を握り締めた。

「はい、ラーサー様」

「この子はすごく頑張り屋さんなんです。ここに来た時は話せないくらいだったんですよ」

柔らかに微笑む婦長にラーサーは頷く。

「本当にすごいです」

「看護婦さんたちのおかげなの」

少女は、はにかんで言った。

「そんなことないわ。あなたの力よ。さあ、お昼まで少し横になつていてね」

「うん」

ラーサーは帝都にある病院を訪問していた。皇帝宮に留まっただけでなく、自ら出向き幅広く市民の声を聞こうという考えからだ。

「毎日大変ではないですか？」

病室を出てから、ラーサーは婦長に問いかけた。

「いえ。患者さんのほうがよっぽど大変ですわ。病気や怪我と戦うのは患者さん自身です。私たちはそのお手伝いをしているだけですから」

婦長は制服の身をしゃんと伸ばして言った。若くはないが、白い肌には健康的な明るさが印象的な美しい人だ。

「奉仕の信念ですか？」

「私自身の力はほんのわずかなものですが、あの子のように言ってもらえると幸せです」

微笑む婦長がラーサーには慈母のように見えた。頭が下がる。

「わざわざお出向きいただきましてありがとうございます。患者さんもスタッフも、とても励まされたことと思います」

「いえ、こちらがお礼をいう立場です。大変参考になりました。

仕事に対する皆さんの姿勢には憧れます。僕もあなたのように働きたいです」

「まあ、ラーサー様が看護婦に？」

おどけて言った婦長にラーサーは顔を赤らめた。

「いえ、そうではなくて……。でも、そうですね……。一度一緒に働かせていただくことができれば嬉しいです」

「ラ、ラーサー様……ッ！」

婦長はふいに声を上げ、ラーサーの手を握り締めた。

「はい？」

「よろしければ、本当に少し一緒に働いてみませんか？」

「えっ、えええっ」

婦長の突飛な申し出にラーサーは目を丸くした。だが、ソリドール家の仕事以外を体験できるなんて、こんなチャンスはない。

「……僕ではお役に立てないかもしれませんが、よろしければ」

「きやあつ、決定ですわね♪ まずは着替えていただきます」

「はい、よろしく願います！」

元気に返事をしたラーサーに、婦長はとろけそうな笑みを浮かべた。

（ここって女子更衣室……だよな？）

ラーサーは混乱した頭で確認した。

婦長は手馴れた手つきで、ラーサーの服を脱がしている。あまりにも素早い動作なので、ラーサーは有無も言えずされるがままになってしまっていた。

「あ、あの……」

ラーサーは何とか口を開いた。

「はい？」

「そ、その制服は？」

台に用意されている制服を指差す。

「おほほ。すみません、女性用しかなかったものですから」

なんて言っている間にドロワーズ（ゆったりとした膨らみを帯びたズボン形の下着）を履かされ、紺のワンピースを被せられ、白いフリルの付いたエプロンを付けられていた。

「私にも息子がいるんですけど、もうゴツつくて、いかつくて、でかくて。ラーサー様みたいな子が欲しかったわ」

「そ、そうなんですか……」

「やっぱりお似合いですわ。うふふ、リトル・ナースそのもの♡」

最後にざくつとピンでナースキャップを頭に固定し、婦長はうつとりと頬に手を当て言った。ラーサーを見詰めているだけで、看護疲れが消えていくような気がする。

「で、でも僕は男ですよ？」

「何を仰っているんです？ ラーサー様より可愛らしい方なんてそうそういませんわ。制服も喜んでいますよ。堂々となさって」「ど、堂々って……」

「婦長！ ここにいたんですか!?」

ふと、勢いよくドアが開き若い看護婦が入ってきた。

「一〇五室のおじいちゃんが、プリンで喉を詰まらせたんです！」

「どんだけ硬いプリンよ！」

「それが、BIGプリン一気飲み大会をやったみたいで……」

「もう！ すぐ行くわっ」

婦長と看護婦は嵐のように去っていった。

「……」

残されてしまった。

「あ、あれっ？」

自分の服がない。困ったラーサーは、取り敢えず一〇五室に行くことにした。背中を叩くくらいは自分にもできるだろう。

帝都で一番大きな病院はビルになっており、一〇五室までかなりの距離がある。ラーサーはすーすーと風が入って頼りないスカーフトを押さえて歩いた。誰も気にしていないはずなのに、すれ違う人全員がラーサーを見ているような気がする。

「おい、看護婦さん！」

ドアが開いていた病室から声がした。周りを見たが、看護婦は見当たらない。ラーサーのこのようなようだ。対処できないかもしれないが、放っておくわけにはいかない。ラーサーは病室に入った。

「どうされました？」

「ナースコールしても誰も出ねえぞ」

ベッドの患者は、顔の右半分を包帯で覆った大柄な男だった。右足を骨折しているらしく天井から吊ってある。名札には「リッ

キー』とだけあつた。

「すみません」

「いや、可愛い看護婦さんが来てくれて嬉しいぜ。頼むよ」

「え……？」

何を頼んでいるのだろう。首を傾げるラーサーに、リッキーはサイドテーブルに置いてあつた空の尿瓶を指差した。

「あんた新米か？ 俺、まだ自分でトイレいけねえんだよ」

「そ、そうなんですか……じゃ、じゃあ失礼しますね」

ラーサーはごくり、と息を飲み込んだ。

（奉仕、奉仕、奉仕の信念！ 看護婦さんたちは、毎日してることなんだから！ それに、僕は男だし全然恥ずかしくなんかないじゃないか）

まずはドアを閉めて。深呼吸を数回。ラーサーは思い切つて、リッキーの下着を下ろした。

（お、大っきい……！）

目を見張るラーサーに、男は笑い出した。

「こんなの初めて見る？」

「……す、すぐに終わらせませぬっ」

ラーサーは尿瓶を掴むと、ぐいぐいとリッキーの性器を押し込んだ。

「痛てえっ。ちゃんと手え使つてやってくれよ」

「す、すみません……っ」

手を添えて、優しくリッキーの先端を誘導する。だが、中々入つていかない。サイズが合わないのだ。

「あ、あれ？ とうかな？ すみません、痛くないですか？」

「いいや、スゲー気持ちいい……」

ラーサーの手の中で、リッキーの性器はどんどん膨張した。

「え、あつ、リッキーさんダメです！ 大きくしないで下さいっ」

「無理言うなよ。あんたみたいな可愛い看護婦が触つてくれるんだぜ？」

リッキーは手を伸ばして無防備なラーサーの尻を撫でた。

「な、何するんですかっ!?」

「いいじゃん。看護婦さんもたまってるんじゃないの？」

無骨な手がスカートの下に忍び込んでくる。

「やめてください！ も、漏れちゃつてもいいんですか？」

「トイレなんて嘘だよ。本当はあつちのほう」

「えっ？」

「たまつちまつて、ヤバいんだ」

リッキーは悪戯を見つけられた子供のようになつた。

「そ、それは看護婦の仕事じゃありません！ 御用がないのでしたら僕は……わ、私は戻りますッ」

ラーサーは顔を真っ赤にして尿瓶をサイドテーブルに置いた。

なんて患者だろう。看護婦は本当に大変な仕事だ。

「何言つてんだよ？」

リッキーはきよとした顔でラーサーを見詰めた。

「この看護婦はみんなやってくれるぜ。元気になつて欲しいってな。婦長とか凄いや？ 三発は軽いな」

それつて何てエロゲー、とは言わず、ラーサーは驚きに瞬きを繰り返した。何という徹底した奉仕の信念なのだろう。患者のためなら、自らの身も厭わない。エロースを超越するアガペーだ。

「あれ？ 研修やんなかった？」

「は、はい……」

「勉強するより、実践だろ。頼むよ。な？」

迷つたラーサーは俯いた。否応なくリッキーの膨張したものが

目に飛び込んでくる。赤く染まり、苦しそうに脈打っている。ここにいるのは、看護婦の信念を学ぶためだ。迷ってはいけない。「……では、つたないかと思えますが」

「大丈夫、大丈夫♪」

そう言うときリッキーは再びスカートの中に手を忍ばせた。薄い生地越しに、硬い指が足の付け根に向かって昇っていく。

「あ、あの、私はいいですから……」

「遠慮はなし。二人でやったほうが気持ちいいだろ？」

「でも、その……！」

身をよじるレーザーに構わず、リッキーの指が股間に触れた。

「！」

「っ……！！……」

完全にバレた。

レーザーの顔から血の気がサーツと引く。男の自分が看護婦の格好をしてるなんて。変態と思われるに違いない。

「僕は、看護婦さんたちの奉仕の信念を勉強させていただこうと思つて、その……ご、ごめんなさいっ！」

「やべえ。やつべーよ……！」

リッキーはペろりとレーザーのスカートをめくった。ひらひらとレースが付いたドロワーズが誘うように膨らんでいる。リッキーはそのままドロワーズを下ろそうとした。

「ス、ストップ！僕はオトコですから、見ても……」

「確かに。こんなの付いてるんだもんな」

リッキーはドロワーズの上から、レーザーの性器をまさぐった。

「んっ……！」

「この触り心地はまだ皮付きだなあ。オナニーは？してんの？」

「……えっ」

「まだ、あんまり経験ないか。ほら、こうやって……」

リッキーは乳搾りをするようにレーザーの性器を握りこむと上下に手を滑らせた。ドロワーズがさらさらとレーザーを擦る。

「あつ、ふあつ……！」

「ハハ。ちよつとしただけで、もう勃ってきてるぜ。やらしい看護婦さんだな」

「そんな……つあ……こと……」

レーザーはぎゅつと目をつぶった。リッキーの手が加速していく。こんなに恥ずかしいことを婦長たちは克服しているのだろうか。

「先走りですゲーとろとろになってきてますよお？」

意地悪に言ったリッキーにレーザーは下唇を噛んだ。先走りに濡れたドロワーズはレーザーを絡め取り、身を振じらせる。

「ひあつ、ああつ……んっ、ああああつっ」

レーザーは耐え切れず放った。ドロワーズの中で精液が飛び散り、膨らみに溜まる。

「あーあ。早すぎ。俺より先に出しちまったのかよ」

「すみません……」

レーザーは息を抑えながら、頭を下げた。「そんなに真剣に謝るなよ。じゃ、それ脱いで」

「は、はい」

ドロワーズを完全に脱ぐと、スカートの中が余計にスースーする感じがした。ふいにリッキーに抱え上げられる。

「わっ」

「いらっしやいませえ♪」

目の前にはリッキーの膨張したものが。お尻はリッキーのほうに向いている。

「こんな……」

「恥ずかしがるなよ。スゲー可愛い尻だぜ？」

リッキーはペロりとスカートを捲り上げ、白いラーサーの尻を円を描くように撫でた。ぞくつとラーサーの体が震える。

「お、重たくないですか？」

「全然。足以外は何ともねえから。もつと、腰下ろして……」

言われるままに腰をゆっくり下ろすと、リッキーの口内が待っていたようにラーサーの性器を咥え込んだ。

「ふああ……っつ」

小さな袋を手で転がしながら、吸い上げてくる。

「ほら、看護婦さんも」

「は、はい……！」

ラーサーも負けじと口を開いた。ぐつと口の中に入れていくが、全部収まりきらない。

（ほ、本当に大つきいよお……）

それに熱い。舌が温められていくのがわかる。ラーサーは溶かすように舐め上げた。

「はあ……はあ……ん、ん……っ」

先端をくすぐるように舐めながら、リッキーの真似をして袋を転がす。リッキーの荒い息を尻に感じた。

（気持ちいいのかな……？）

ラーサーは夢中でしゃぶりついた。唾液の音が病室に響く。

「スゲー……やばいよ、看護婦さん」

「い、痛いですか？」

「気持ちいい……。じゃあ、これは？」

「固めのクリームが菊門に塗り込まれた。」

「ちよ、あっ、そこは……っ！」

「やったことねえんだ？」

リッキーは白色ワセリンを塗りつけた指を、ラーサーの内につくりと侵入させていった。

「ひんっつ」

ビクン、とラーサーの性器が震え反り勃った。

「え？ マジ、ピンゴ？」

「や、やめてください、そこは……っあ、ああああっ」

「やめねえ」

リッキーは硬い指で前立腺をこすり上げた。ラーサーの体を切ないような痺れが駆け上がる。

「ふああっ、あ、ああああっ」

「んじゃ、そろそろ……」

くるりとラーサーの体をリッキーはひっくり返した。

「えっ、あっあああ……！」

息つく暇もなく菊門にリッキーがえぐり込んでくる。

「痛っ……む、無理です……ふあっつ」

「キツ……、もうちよい滑りよくすつから」

リッキーはドロワーズに溜まっていたラーサーの精液を塗り込んだ。余分な精液がシートにこぼれて、染みを作っていく。

「あ、は……はあ……」

鼻腔を突く匂いが自分の出したものだと思うと、ラーサーは眩暈がした。だが、すぐに刺激がラーサーを目覚めさせる。ゆっくりとリッキーの強張りが押し進んできた。

「ふあっ……あっ……あああっ」

「全部入ったぜ。うあ、すげー絞め付け……」

「く、苦しい……です……っは……ふあっ」

体の中身が押し上げられるような感覚にラーサーは喘いだ。菊

門の周りから内まで、ビリビリするほど熱い。

「待ってる、今……ん……これで、さっきのところ擦ってやっから……つく！」

急にレーザーの絞め付けが強くなり、リッキーは息を荒くした。

「何？もしかしてスッゲー期待した？」

「そ、そんな……苦しいから早く抜いてくだ……は、はうう！」

レーザーの内をいっぱいにしていたリッキーの強張りが引き、先程のポイントで行ったり来たりする。

「ふあっ、ああっ……んあっ……っ」

「俺、頭悪いけど……っは……こーゆーのは覚えんの早えんだ……」

「あ、あああっ……」

指より熱く太いものが、レーザーの前立腺を押し潰す。レーザーは足の付け根の奥で、何かが暴れだした気がした。

「はあっ、あ、あああっ」

リッキーの優しい動きに我慢できず、レーザーは自ら腰を動かした。

「どうした？腰、自分で動かして」

「……ご、ごめんなさい」

止めないといけないと思うのに、腰が止まらない。苦しきよりも抜き差しする奇妙な快感がレーザーを支配し始めていた。

「マジで初めてか？よだれ垂らして、ドロドロだし」

リッキーはレーザーのスカートをめくり上げ、まじまじと見詰めた。レーザーの小さな入り口が、面白いほどリッキーのものを飲み込んでいっている。

「み、見ないでください……はあっ……っ」

素の肌に風が当たって、スーッとする感触が倍増した。

「このまま手え離したら、スカートに付くんじゃねえ？」

リッキーはずん、と腰をレーザーに打ちつけた。衝動にレーザーの体は浮き上がり、スカートが触れそうになる。

「っあ、あああ……っや、やめて下さい……スカートが汚れたら……っ」

婦長にどんな顔をして制服を返せばよいのだろう。

「でも、俺に見て欲しくねえんだろ？」

リッキーはゆっくりと引き抜くと、再び一気に腰をレーザーに打ちつけた。

「いあっ……っ……!! 僕が……はあっ……っ……持ってますから、お願いです……んっ」

「じゃあ、俺に看護婦さんのここ、ずっと見せてくれるんだな？」

「はい、だから……っ」

「オーケー」

リッキーはレーザーの頬にキスをすると、レーザーにスカート

の裾を渡した。離すまいとレーザーは抱きかかえるようにスカート

トを胸に押さえる。

「全部、丸見えだぜ？」

「あ、あああ……っ」

制服の上から、リッキーの指が乳首をまさぐってくる。乳房な

んでないのに、くすぐったいような心地よさを感じる。下腹部か

ら押しあがってくる荒っぽい快感とない交ぜになって、レーザー

は身をよじった。

「また一人でイッちまうの、看護婦さん？」

「ご、ごめんなさい……っ」

「スカート自分でめくり上げて、看護婦に付いてないはずのもの

ぶるぶる揺らしながら、腰くねらせんのが気持ちいいんだな」

「……っ！これは……あっ……リッキーさんに元気に……っ……なっ

て……あ……もらうのに……」

「元気になつてんのは看護婦さんだろ？ さつきから、腹にたらたらなんか飛んでくるぜ」

リッキーが、ずん、とレーザーに腰を打ちつけた。そのままレーザーの腰を押さえつけ、内を掻き回す。

「あ……はあ……あ……あ……あ……あ……」

レーザーはリッキーの言葉に耳を傾けまいと、腰を浮き沈みさせた。抜き差しされるたびに敏感になつて、背筋が反り返つてくるほど気持ちいい。

「ナースコール押してみるか？ みんなに見てもらおうぜ」

「や、やめて……つ……あ……下さいっつ」

「ち、千切れる……つ……つ……そんなに締め付けなくてくれよ」

「すみ……ません……つ……つ……リッキーさんを元気にさせるためなのに……つ……あ……僕が気持ちよくなつています……う……」

何度も弱いポイントを押され、レーザーの性器からは先走りが止め処なく溢れてくる。涙も滲んで、視界がぼやけた。

「んじや……つ……一緒に出そうぜ……つ……」

「つ……あ……」

リッキーは、レーザーの両膝に手を回して抱え上げた。M字になつたレーザーの体をリッキーは軽々と上下させた。

「は……つ……あ、ふう……ああ……あ……つ……」

今までと全然違う動きだ。ねじのように腰を回され、抜き差しは激しく繰り返される。

「やべえ……絡み付いてくる……つ……つ……」

「は、激しい……つ……です……つ……つ……あ、ああ……あ……」

壊れてしまふそうだ。だが、入り口はリッキーを飲み込むのをやめない。

「やあ……つ……あ、ああ、ん……う……つ……」

「あんた一体何者だよ……つ……こんなヤバい体して、看護婦の格好して……つ……」

「ふ……ああ……あ……つ……リッキーさん……つ……そ、そんなにしたら……あ……つ……あ……ふ……う……つ……」

「最初から……つ……あ……こうしたくて来たんじやねえのか？」

首を振りたいが、腰から伝わるガクガクとした動きに顎が縦に揺れるままになつてしまふ。

「どんだけエロいんだよ……つ……！」

「い、い……あ……つ……あ、出ちゃう……う……出ちゃいます……つ……つ……」

リッキーの腰が最奥に達した瞬間、レーザーは勢いよく放つた。

「ああ……あ……ああ……つ……あ……！！」
体が足の先から指までぎゅつと縮まり、すべての力が下腹部に集まる。レーザーの内に搾り取られるように、リッキーも熱さを放つた。

「つ……う……つ……つ……！！」

放たれ続けるレーザーの精液が、リッキーの顔に吹きかかった。中々弛緩しないレーザーに、リッキーはすべてを搾り取られてしまふ。

「あ……つ……は……つ……は……あ……あ……」

レーザーはぐつたりとしたまま、リッキーの上で荒く息を吐いている。小さな体が呼吸に合わせて動くのが何とも艶かしい。

「……ふ……あ……つ……すみません、汚しちゃいました……」

レーザーはゆつくりと身を起こして、リッキーの顔を舐めた。

「……」

「苦い、ものなんです。少しは元気になりましたか？」

「あ、ああ……」

「よかったです」

ラーサーはおほん、と咳をするとそそくさと身だしなみを整えた。ドロワーズはどろどろに汚れたが、制服は何とかセーフだった。あのおじいちゃんは大丈夫だろうか。

「じゃあ、僕……私はこれで……」

「見舞いに来てやったわよー」

ふと、ドアから声がした。ガンガンとドアを蹴っている。

「い、今、治療が終わったところです。どうぞ」

ラーサーがドアを開けると、派手な美人と亜種の男性が立っていた。手には見舞いらしい果物カゴを持っている。

「私は失礼しますね」

にこやかに笑い、ラーサーは急ぎ足で去った。

「……何でソリドールの坊ちゃんが看護婦してんのよ！」

ドアが閉まると、女はわっと叫んだ。

「はあ？ 何いってんだ、エルザ。あいつはただの超エロい看護婦さんだぞ」

「一目でわかるでしょ。そんなんだから、レース中に海に落ちて、タコにさらわれて足折って帰ってくんよ」

「間違いないツス」

亜種の男も頷いた。

「マジかよ……。俺、もうチ○コ洗わねえツ!!」

「汚ねえよ！」

その後、リッキーは説明したがエルザたちには理解されず、逆に何マスターベーションでベッドを汚しているのかと腕を一本折られた。無事にバーフオンハイムに戻りレースに復帰したのは二ヶ月のことである。

☞

（よかった。元気になってもらえて。婦長さんが言っていた嬉しさってこんな感じなのか……）

ラーサーの胸に温かい気持ち湧き上がってくる。体はちよつと痛い仕方がない。奉仕の信念だ。

「あ、ああ！ ラーサー様！」

声に振り返ると婦長が立っていた。必死で探していたのか、額に汗を浮かべている。

「おじいちゃん、大丈夫でしたか？」

「はい、そのまま飲み下せたんです。今は祝勝会中ですわ。それより、リッキーさんの病室から出ていらしたのでは？」

「あ、はい……」

ラーサーは今までのことを思い返して顔を真っ赤にした。「何かされませんでしたか？ あの方はいつもお尻を触ってくるんです。困った方ですわ」

「それを受け止めていらっしゃるのでしょうか？ 尊敬します」

「いいえ、看護とセクハラは別です。きゅつとつねって、お灸を据えて差し上げていますのよ」

「え……」

ラーサーは、そこで初めてリッキーの嘘に気が付いた。

政治は貽と鞭。看護婦もやっぱ貽と鞭……なのか、ラーサーは考え込んだ。



奥付

MANIAC JOB SYSTEM

マニアックジョブシステム

～勝負服でニューゲーム～

⇒ 発行サークル ⇒

EGOISM

漫画:カスカベアキラ 文:鳥越やよい

⇒ 発行日 ⇒

2007.08.17

⇒ 発行者連絡先 ⇒


Mail webmaster@egoism-32770.net

website URL <http://egoism-32770.net/>

カスカベアキラ個人URL <http://frisky.ivory.ne.jp/>

⇒ 印刷 ⇒

有限会社 トム出版様



from FINAL FANTASY XII



presented by EGOISM 2007